

## 世界遺産：工夫続けた3年間 平泉住民の夢結実

「平泉」の世界文化遺産登録が決まった地元の岩手県平泉町は、祝賀ムードに包まれた。国内からの推薦遺産として、3年前には初の「落選」ショックも味わった。世界遺産を目指す住民らは、一体となって景観形成に取り組み、町の良さを見直す契機にも。関係者は「登録は町の誇り。被災者への元気づけになれば」と喜び、東日本大震災で未曾有の被害を受けた岩手県にとっても、復興に向けた大きなはずみになりそうだ。

平泉町の表玄関にあたる通称「中尊寺通り」は、JR東北線の平泉駅から中尊寺参道に続く約1.5キロの県道。江戸時代には奥州道中と呼ばれ、松尾芭蕉(ばしょう)が「奥の細道」で訪れた街道としても知られる。しかし、現在は空き店舗が目立ち、往時のにぎやかさはない。

1995年に東京から妻の実家がある平泉町に移り住んだ1級建築士の小野寺郁夫さん(58)は、寂れていく中尊寺通りを見て残念に思った。「通りは平泉の『顔』。活性化できないか」。まちづくりに興味を持っていたこともあり、町が05年に設置した中尊寺通りの整備プロジェクトチームに志願。委員長の大役を任せられた。

1年後、歩道の整備や電線の地中化など景観向上に重点を置いた案ができたが、住民からは町並みが増える不安から反対論が続出。「これだからよそ者は……」と批判もされた。だが、小野寺さんはねばり強く説得し続けた。

住民に変化が表れたのは、3年前の「落選」がきっかけ。それまで無関心だった住民が、酒を酌み交わしながら小野寺さんと町の将来や夢を語るようになり、整備計画はまとまった。通りには手作りあんどんが設置されるなど、住民の自主的な動きも広がった。

また、05年に町が景観条例を制定する際、小野寺さんは規制対象を町全域(約6339ヘクタール)とするよう提案。地区によっては建築物を和風デザインに限定し、屋根の勾配まで規制するなど全国でも厳しい内容にした。08年の改正では罰則規定も盛り込んだ。「よそ者だから気づける町の魅力もある。それが平泉らしい景観づくりだった」と、世界遺産に登録されても、恥ずかしくない町並みを目指した。

そして、3月の東日本大震災。県内では沿岸部を中心に、今も多くの人が不自由な生活を強いられている。小野寺さんは「大震災で暗いニュースが多い中、登録は久々の明るい話題。被災者への元気づけや復興の力になればうれしい」と話す。新たな町づくりを進めていく被災地に、平泉の町並みにも込めた「安らぎの場所」の必要性も感じている。小野寺さんの目には、将来の平泉と被災地の町並みが浮かんでいた。【湯浅聖一】

### ◇町役場で待機の職員、安堵



世界遺産登録決定の報告を受けて万歳する滝山秀樹副町長(右から3人目)ら＝岩手県平泉町の同町役場で2011年6月26日午前1時8分、三浦博之撮影

26日午前0時50分過ぎ、パリの菅原正義町長から「登録」の一報が入ると、平泉町役場で待機していた職員から拍手が起こった。滝山秀樹副町長は「今か今かと待っていたのでうれしい。登録延期から3年は長かったが意味のある3年間だった。県内は東日本大震災の被害を受けたが(登録が)多くの人々の励みになれば」と安堵(あんど)した表情をみせた。



住民とまちづくりに関して話し合う小野寺さん(右)＝湯浅聖一撮影